

提 案

異常気象下でのデータの集積について

松岡 茂¹

北海道からここ茨城県筑波郡に移り住んで5回の冬を越したことになる。しかし、5回の中で、1983-84年の冬ほど異常に寒く、また異常に雪の多い年はなかった。勿論、筑波での気温や積雪量は、北海道の気象条件に比べればそう厳しいものではないが、例年2-3回の春先のごくわずかな積雪があるだけの地域にとっては、その冬はまったく異常といえるものであった。12月下旬以降、前2回の冬より平均気温で2-3度も低かったからである(図1)。

私たちの生活も、そのために大きな影響を受けたはずである。バイクや自転車での通勤通学は制限され、駐車場の雪かきはしなければならず、そしてなれない凍結路面での交通事故などが多発した。経済的には、野菜の異常ともいえる値上がりを招いたし、東京の首都高速道路では、タイヤチェーンによる路面の損傷のため、莫大な費用がかかったという。逆にいえば、三浦半島のキャベツ栽培農家は、ヒヨドリに食害されたキャベツも出荷できるほどの売手市場によって、かなりの利益を手中にし、タイヤチェーンのメーカーは、生産が追いつかず在庫を一掃してしまったということになるだろう。こうした人間生活に大きな影響を与えた気象条件の“ふれ”は、鳥たちの生活にも影響しているのだろうか。もし影響しているとすれば、それはどのような形であらわれるのだろうか。人間の社会での

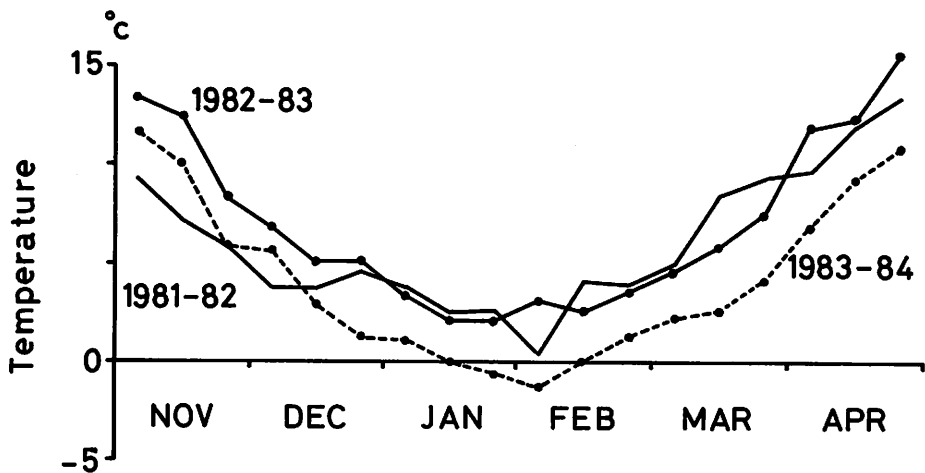


図1. 旬毎の平均気温の季節変化(農業環境技術研究所提供の気象観測データから作製)

1984年9月20日受理

1. 〒305 茨城県筑波郡谷田部町観音台3-1-1 農業研究センター

ように、一方にとってかなり悪い条件が、他方からみればそれほど悪くはないかあるいはむしろ好条件であるといったことが、鳥の社会でもみられるのだろうか、また、ある年の冬の異常気象がそれに続く年の昆虫や種子生産に影響して、鳥への影響は一定の時差を伴ってあらわれるのだろうか。

こうした単純な興味から、ここで1つの提案をしてみたい。この提案の実行は、日本の鳥関係の組織の中では、「日本野鳥の会」が行うのが最もふさわしいし、また組織力の点からいっても、野鳥の会が適当であると考えられる。

提案は、1983-84年の冬の異常気象下でみられた、何か変わった観察例や調査結果、あるいは気のついた事などを野鳥の会で収集してはどうかということである。そうした事例を、何か異常と思われる事が起こるたびに集積してゆき、各々の場合について考察しうるものは議論を進め、また個々の事例についてそれが困難な場合は、何回かデータを集積した後に、それについて考えてゆくようにしてはどうだろうか。異常の例を集めることを強調したが、異常気象にもかかわらずこれこれの鳥については、その生活や個体数の変化の仕方が例年どおりであったという例も、この場合重要な資料となるであろう。

単なる興味から出した提案ではあるが、こうしたデータを収集することの意味を、もう少し考えてみたい。私たちが、鳥を野外で観察する場合、一般的には鳥たちの“正常な部分”をみていることが多いのではないだろうか（観察者の存在が鳥の生活に大きな影響を与えていれば話は別だが）。正常な部分の観察の積み重ねは、鳥たちの生活の一般的パターンを私たちにみせてくれる。それは、雑多なしかも無数の要因がある範囲を振れながら作用しあい、鳥たちの生活に影響を与えた結果とみることができる。そうした要因の中で主要と思われるものについて実験的操作を行い、その要因の影響をさぐり出すことも行われている。実験では、要因の振れを任意にコントロールできるものの、その適用範囲は自然界からみると大変狭いものになっている。ある数個体に関与する少数の要因はコントロールできるかもしれないが、例えばその地域の個体群全体については不可能な場合が多い。これは、実験スペースや費用などの点から考えても明らかである。こうした点から考えると、異常気象というのは、自然が仕組んだそして人間ではとうてい設定のできない大がかりな実験の1つということができる。自然の多様な要因の中では、気象条件だけが大きな振れを示し、他は例年と同じであるという保証はない。従って、この自然の実験結果の解析には十分な注意が必要であり、問題もいろいろあると思われる。そうだからといって解析をあきらめるのではなく、そうだからこそ多方面のデータを収集してそれを解析してはどうかというのが提案の主旨である。

もう一つ付け加えれば、本来はあまり起こりそうもない状態、すなわち異常な状況下での鳥たちの生活なり行動などが、逆に鳥たちの通常の生活や行動の意味を明らかにしてくれる場合が多いということである。異常気象ということではないが、ラックは「ロビンの生活」(思索社)の中で、“異常の研究は正常のさらに正しい理解に導くものである”と書いている。そして、ロビンが赤い羽毛だけのかたまりにも強く反応することから、異常下での行動がロビンの世界と人間のそれではまったく違うものであることを教えてくれると書いている。

異常気象下でのデータばかりでなく、現在進められているような他のデータの集積センターとしても、野鳥の会にはがんばってもらいたいと思う。